

## 毛無峠探訪

原田義則（3組）

日本がかつて世界有数の硫黄生産国だったことをご存じだろうか？ 上田市、東御市、小諸市、軽井沢町、御代田町、須坂市、上高井郡高山村に接する大きな村である嬭恋村からは県境を越えて上田高校に進学した同期生も何人かいましたが、その嬭恋村の北西の端の標高1600m 超の場所にかつて硫黄の一大産地であった小串鉱山がありました。最盛期には2000名以上が住んでいたとのこと。

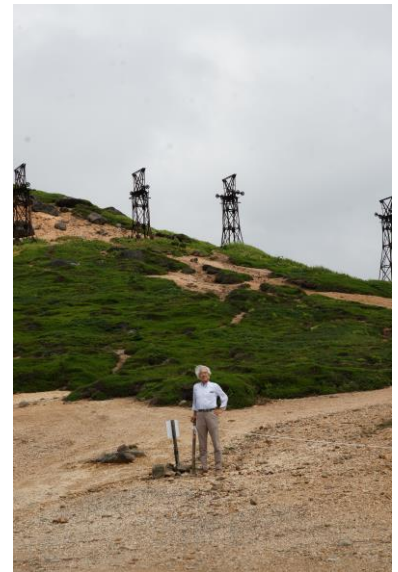
10年ほど前、筑波大学に在職していた頃に、同じ職場の某教授（睡眠障害の専門医）と出身地の話になり、彼が小串鉱山出身で長野高校を卒業したことを知りました。小串鉱山は元同僚が長野高校2年生の1971年夏に突然廃鉱となり、当時長野市に下宿していた元同僚の家族は彼を残して小串を離れたそうです。

小串鉱山は地理的・経済的・人的に長野県との結び付きが強く、精錬した硫黄は高山村・須坂市経由で出荷されていたことは昔から知っていました。私は東部町（現東御市）の東部中学の出身ですが、生まれは両親の出身地である若槻村（現在は長野市）で、父の仕事（駐在さん）の関係で中学校に入るまでの12年間は須坂市に8年間、高山村に4年間住んでいた経験がありますので、深い思い出のある土地であり、その教授とは一挙に親しくなりました。高山村立高井小学校時代には遠足で小串鉱山を訪れたことがありましたが、親に連れられて近くの万座温泉や白根山のコバルトブルーの火口湖を訪れたこともありました。小串鉱山から物資運搬用の鉄索で一旦、高山村まで運ばれた硫黄はトラックで須坂駅まで運ばれるのですが、家に近くの道で荷台から零れ落ちた結晶化した黄色い硫黄のかけらを拾い、宝物のように保管していた小学生の頃を鮮明に思い出すなどして、現在その辺りはどうなっているのか？と是非一度、訪れて見たいと思い始めました。

放置された鉄索は「廃墟マニアのメッカ」と言うことで、数年前からずっと気になっていたのですが、人出での少ない今年がチャンスと思い、梅雨明け後、何回目かの緊急事態宣伝が発令されるまでの間のある日、早朝に家を出て、関越自動車道から上信越自動車道の軽井沢ICを出て、中軽井沢、鬼押し出し、鎌原、万座温泉を経て、3時間弱で標高1823m毛無峠に到着しました。1950年代後半以降、須坂と小串鉱山の間は多分小学生の私も乗ったであろう）バスが走っていたそうですが、道幅は狭くとてもバス道だったとは思えない道を走り、群馬県と長野県の県境に位置する毛無峠に到着しました。驚くべきことに、御飯岳(2160m)と破風岳(1999m)を結ぶ風の強いその稜線には、車が数台の他、中年ライダーが沢山訪れていました。群馬県から長野県に渡る涼しい風の中、ラジコン機が何機も空を舞っていました。

帰りはルートを変えて高山村と須坂市の何故か今も残る数10年前に住んでいたオンボロ屋を訪ねた後、関越道を走り、2時間で自宅に戻りました。次の日、早速、写真を件の元同僚に送った所、「泣きたくなる程嬉しい」との返事を貰いました。小串鉱山では1937年に発生した大規模な地滑りで二百数十名の犠牲者が出ていますが、慰霊を兼ねて元鉱山関係者が何年か毎に集まり登山をしていたそうですが、高齢化が進み、最近ではもう行われておらず、親の付き添いで参加した彼ももう10年以上行ってなかったそうです。

年を重ねる毎に廃墟や廃線好きが昂じるようになり今回、自分と関係のある場所を訪れて見ましたが、幾つもの記憶を呼び起こす楽しい小旅行となりました。尤も同行した家内は「平日の昼にこんな場所に何10人ももの好きが集まっているなんて信じられない！」と書いておりましたが、





御飯岳(2160m)山頂近くに残る 60 年間放置されている物資運搬用の鉄索の残骸。右が小串鉦山跡、左は高山村



草木の生えていない辺りが小串鉦山跡地(標高 1600m 前後)。最盛期は 2000 人が住み、小学校も中学校もあったとのこと。坑道・隧道は毛無峠の下を通り、高山村にまで達していたとのこと。尚、毛無峠の様子は Google Earth の Street View でも見られます。